

喜びも悲しみも歌に込めて

昭和とともに、歌謡曲あり

昭和の歌謡史を、人文科学的見地から論文にまとめた久保正敏さん。旅にまつわる昭和歌謡の歌詞を追って見えてきたのは、ときに明るく、ときに悲しい、

昭和という激動の時代と、その転換点だった――。

国立民族学博物館副館長・教授

久保正敏

●くぼ・まさとし 1949年兵庫県生まれ。オーストラリア先住民研究、民族情報学専攻。

昭和の変遷を歌詞で追う

――久保さんはどういった分野がご専門なんでしょうか。歌謡曲の論文というのはいちよつと珍しいなと思っただんですが……。

もともとはコンピュータの研究者です。「え!?」という感じかもしれませんが、最初は京都大学の工学部

にいて、そこから国立民族学博物館（民博）に移ってきました。

一九七四年に民博ができた当時の梅棹忠夫初代館長は、人文系の人間も、これからはコンピュータを道具として駆使していかなければならないと考える人でした。そこでコンピュータ関係の人材を必要としていたんですけど、京大工学部でもちよつと浮いていた僕の先輩がまず選ばれ

て（笑）、その十年後に、京大で浮きかけていた僕も民博に来ました（笑）。

当初は情報処理やデータベースの作成に携わっていたんですが、徐々に民族学のほうの勉強も始めて、現在は民族文化を情報という視点から研究するのが専門といったところですね。

昭和も終わって間もないころに、

民博で観光人類学のシリーズ本を出すあたり、旅にまつわる原稿を書いてほしいと依頼があつて、そこで執筆したのが「歌謡曲の歌詞に見る旅―昭和の歌謡史・私論―」でした。

もともと歌謡曲には興味があつたんです。大学の修士の時代ですから、一九七〇年代初めのこと。当時は生活が昼夜逆転していて、夜を徹してハンダづけしてハードウェアを開発する日々だったんですが、明け方に懐メロを流す早起き老人向けラジオ番組があつたんです。それを寝ぼけ頭で聴いていたんですけど（笑）、これで歌謡曲にはずいぶん親しみました。

当時は、テレビの普及で一度は廃れかけたラジオが盛り返した時期でもありました。その一つのきっかけが深夜ラジオです。いまでもNHKの「ラジオ深夜便」は隠れた人気番

組ですが、関西では桂三枝（いまの文枝）や笑福亭仁鶴がパーソナリティとなつて聴取者からのハガキを読み上げる聴取者参加型のラジオが人気で、こうした隆盛は「ラジオ・ルネッサンス」とも呼ばれています。

このころはちよつと、フォークが反戦的なものから、私小説的なものに変わっていく節目でもありました。

旅にまつわる原稿になぜ歌謡曲が登場したのかというと、執筆を頼まれたときにふと、歌謡曲には出立や別れなど、旅に関係する歌が多いなと思つたんです。同時に、フォークの歌詞が時代とともに変わつていったと感じたことも蘇つてきて。昭和歌謡の歌詞を「旅」という手がかりで追つてみたら、昭和という時代ならではの人間の営みや時代の変遷が見えてくるんじゃないか――。この論文は、そんな試みでもありました。

情景か、個人的なドラマか

論文を書くにあたっては、ヒット曲ばかりを収録した本から年代ごとのヒット曲を集め、それぞれの歌詞をパソコンに打ち込んでデータベースを作成し、分析を行なったのですが、その際に注目したのが、歌詞に出てくる地名や場所、風景の捉え方それと人称代名詞です。

民博ではたくさんの映像作品を作ってきましたが、たとえば地域の儀礼を撮影するとき、研究者にとつて興味のある一部分だけにカメラを向けてしまうと、その儀礼の全体はわからなくなってしまう。でも、「これがこの儀式の前後の流れなのか」とわかってもらうためには、どうしても全体像が必要です。要するに、ズームインして撮影すると主観

*「国立民族学博物館研究報告」第15巻4号に収録